

船越明子（委員長）、角田 秋（副委員長）、  
小島 瞳、北 恵都子、松井 芽衣子、  
関口 瑛里

## I. はじめに

昨今においては『何らかの AI』を用いて、入力したテキストや音声、画像などから、新しいもの（テキストや音声、画像など）を作り出す、その AI」（香田, p.16, 2025）と定義される生成 AI が目覚ましい変化を遂げている。生成 AI はあらゆる分野においてその存在を大きくしており、看護教育の現場においても同様である。一方で看護教育における生成 AI の活用には課題も多く、現場では生成 AI を使用している可能性がある学生への対応方法や学内における運用方法の検討に苦慮する声も上がっている。生成 AI を使用しない学生はすでに少数派(永井, 2025)であり、看護教育における効果的な生成 AI の活用方法について知識を獲得する必要性に迫られている現状から、本委員会では「精神看護学の授業や実習で生成 AI を活用するには」というテーマで研修会を開催した。本稿は、その研修会終了後に実施したアンケート調査の結果を報告するものである。

## II. 研修会の概要

本研修会は日本精神保健看護学会員ならびに精神看護学の教育における生成 AI の活用に関心のある教員および看護師を対象に実施した。2026 年 2 月 7 日（土）14 時～15 時 30 分にオンラインでの開催とし、永井翔先生（人間環境大学看護学部 助教）にご講演いただいた。

## III. アンケート調査の方法

アンケート調査は、研修会終了後、Microsoft forms を用いて無記名で実施した。調査内容は、基本属性（年齢、看護師経験年数、看護教育経験年数、現在の勤務先）ならびに研修内容に関する評価（研修内容への理解度、関心度、満足度、役立ち度、開催日時の適切度）とその自由記述、学びや感想に関する自由記述とした。研修内容に関する評価はすべて 4 件法で行った。自由記述においては内容に基づいて分類を行った。

## IV. 結果

研修への事前申込者は 238 名であったが、当日の参加者は 129 名であった。アンケートの回答者は 77 名であり、有効回答率は 59.7%であった。

### (1) 参加者の概要

#### 1) 年代

年代は 40 歳代の参加者が 30 名（39%）と最も多かった。次いで、50 歳代の参加者が 27 名（35.1%）であり、60 歳代以上の参加者が 10 名（13%）、30 歳代の参加者が 9 名（11.7%）、20 歳代の参加者が 1 名（1.3%）の順であった（図 1）。

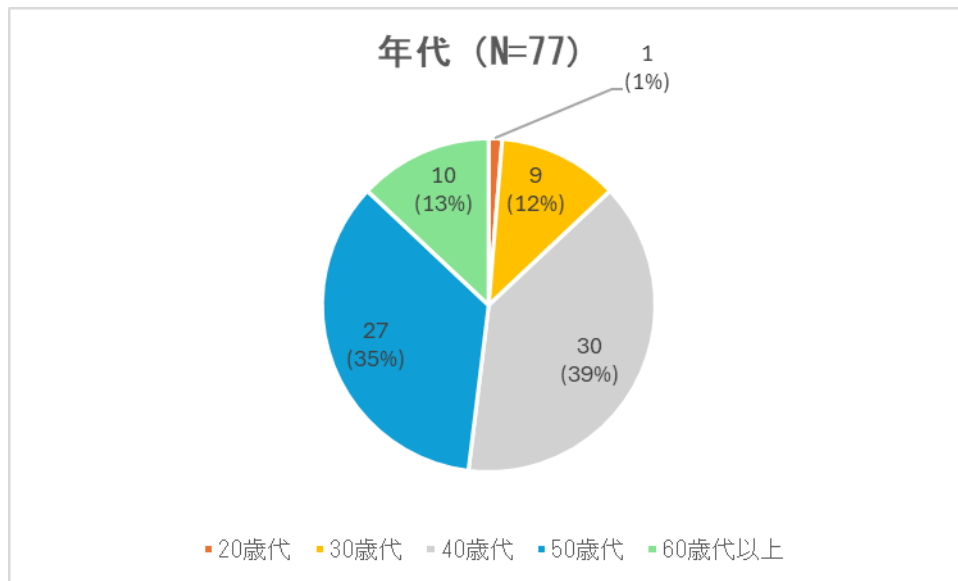


図 1. 年代

2) 看護師経験年数

参加者の看護師経験年数は 10 年以上 20 年未満が 25 名 (32.5%) と最も多く、次いで 20 年以上 30 年未満が 22 名 (28.6%)、5 年以上 10 年未満が 16 名 (20.8%)、30 年以上が 9 名 (11.7%)、5 年未満が 5 名 (6.5%) の順であった (図 2)。

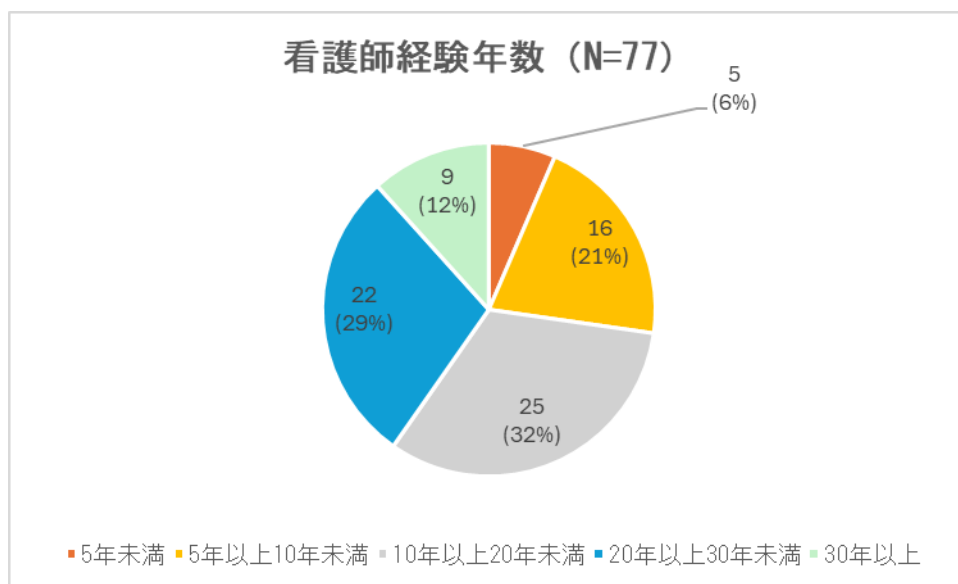


図 2. 看護師経験年数

3) 看護教育経験年数

参加者の看護教育年数は 10 年以上 20 年未満が 32 名 (41.6%) と最も多く、次いで 5 年未満が 15 名 (19.5%)、5 年以上 10 年未満が 14 名 (18.2%)、20 年以上 30 年未満が 13 名 (16.9%)、30 年以上が 3 名 (3.9%) の順であった (図 3)。

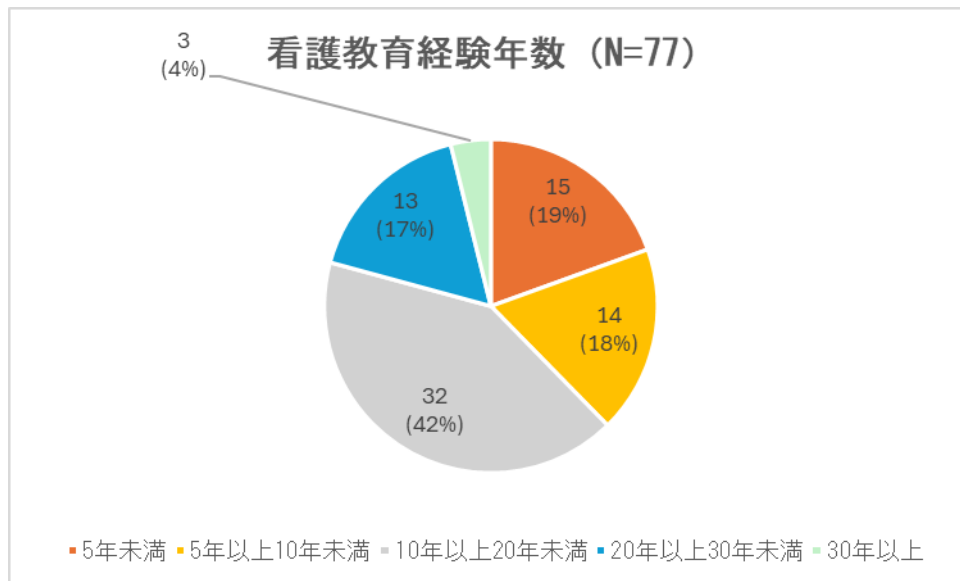


図 3. 看護教育経験年数

4) 現在の勤務先

参加者の所属先は大学等教育研究機関が 60 名 (77.9%) と最も多く、次いで病院等医療機関が 12 名 (15.6%)、その他 4 名 (研究機関と医療機関両方・専門学校・看護職に対する研修機関) (5.2%)、訪問看護ステーション 1 名 (1.3%) の順であった (図 4)

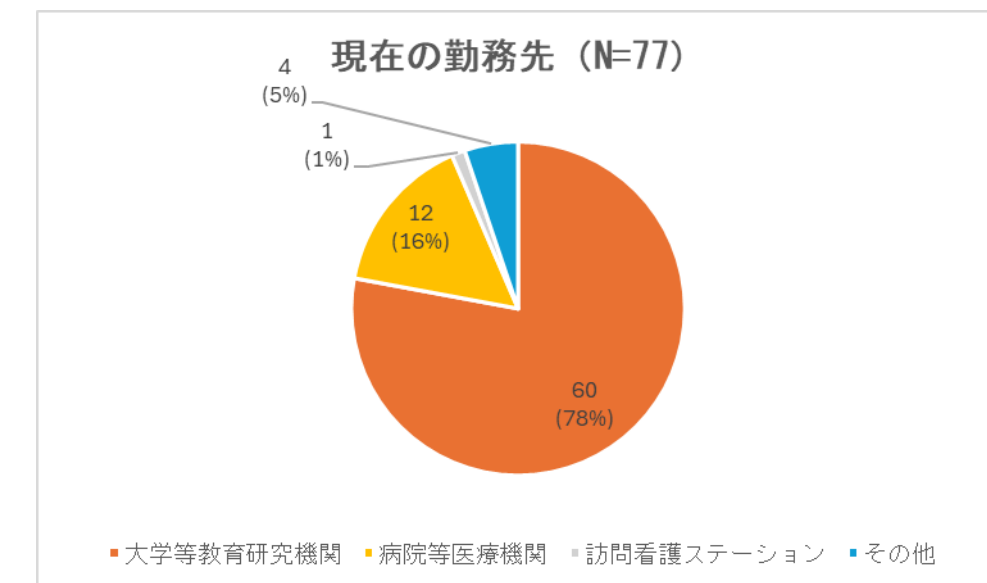


図 4. 現在の勤務先

(2) 研修内容に関する評価について

1) 研修理解度

研修内容に関する理解度では「非常に理解できている」「やや理解できている」と回答した参加者が 77 名 (100%) であり、すべての参加者にとって理解しやすい内容であった (図 5)。

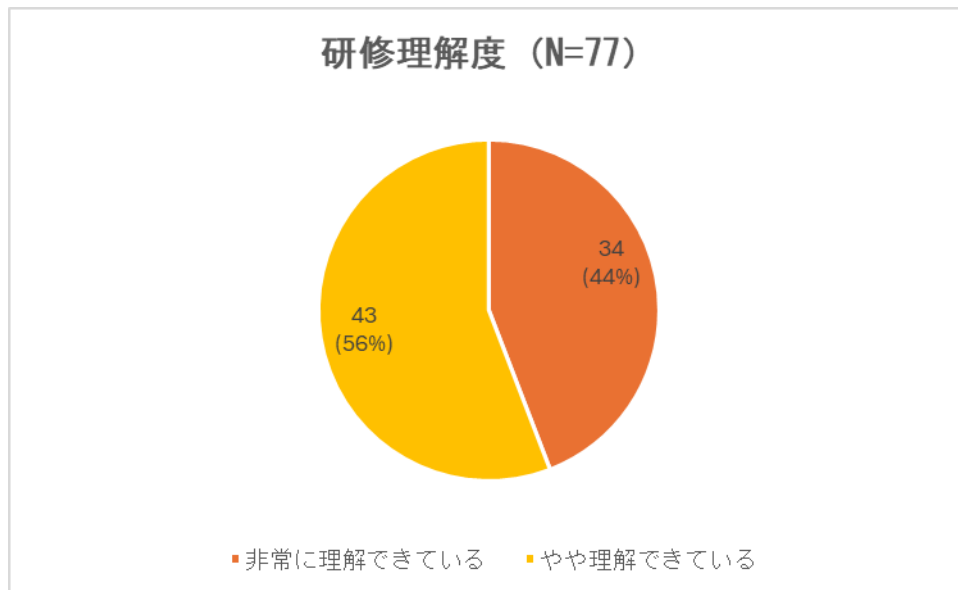


図 5. 研修理解度

2) 研修への関心度

研修内容に関する理解度では「非常に関心があった」「やや関心があった」と回答した参加者が 77 名（100%）であり、すべての参加者にとって関心の強い内容であった（図 6）。

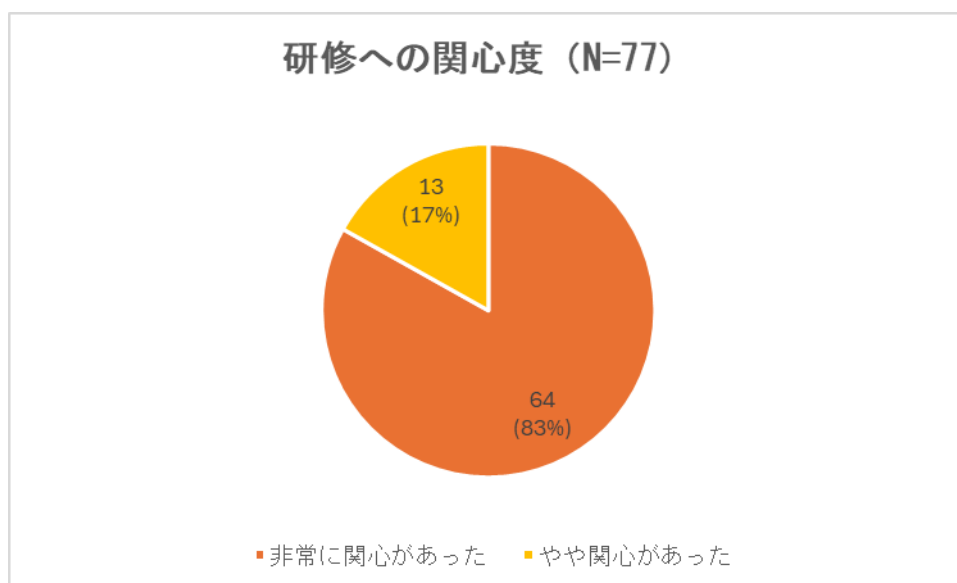


図 6. 研修への関心度

3) 研修内容への満足度

研修内容に関する満足度では「非常に満足している」「やや満足している」と回答した参加者が 77 名（100%）であり、すべての参加者にとって満足できる内容であった（図 7）。

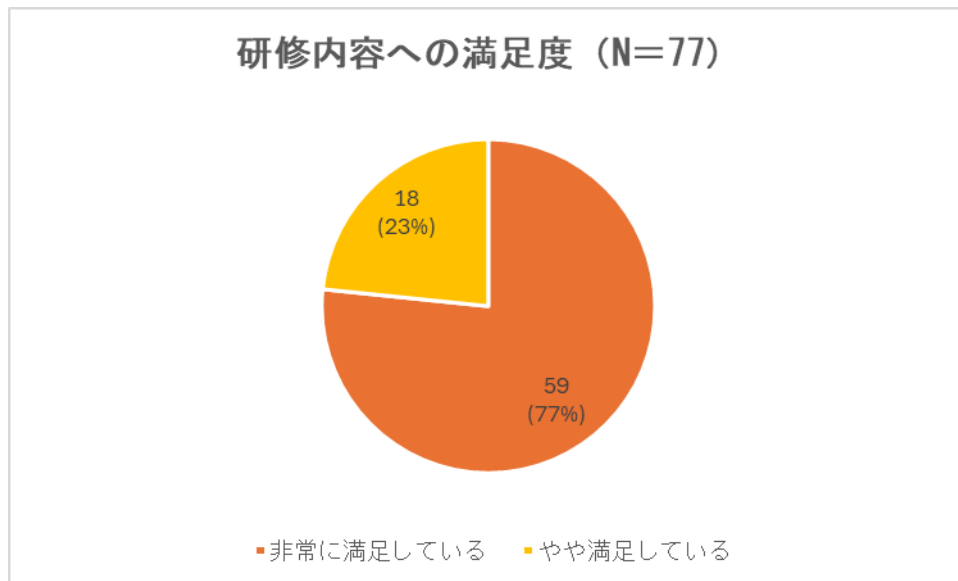


図 7. 研修内容への満足度

4) 研修内容の今後への役立ち度

研修内容に関する役立ち度では「非常に役に立つ」「やや役に立つ」と回答した参加者が 77 名（100%）であり、すべての参加者にとって満足できる内容であった（図 8）。

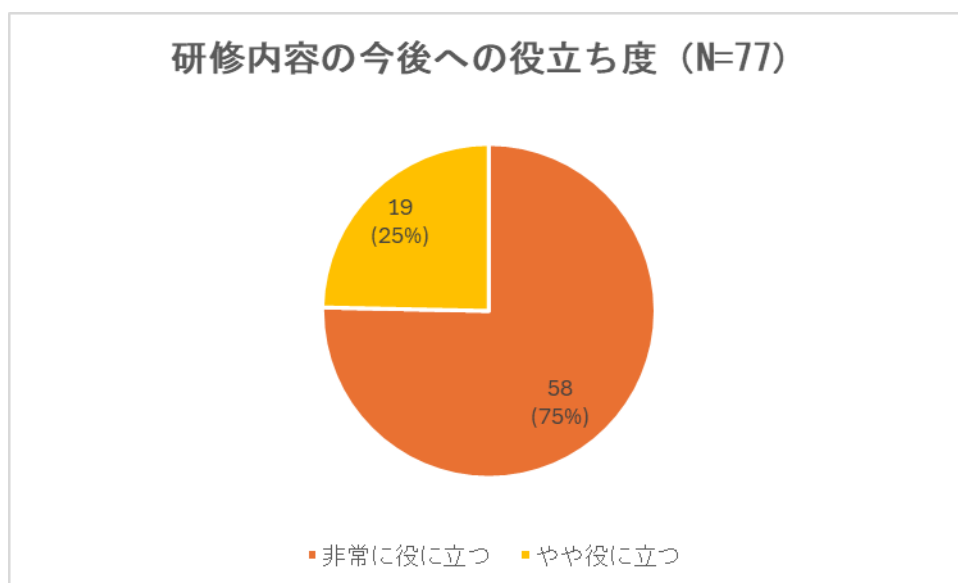


図 8. 研修内容の今後への役立ち度

5) 開催日時の適切度

開催日時の適切度では「適切であった」「やや適切であった」と回答した参加者が 76 名（98.7%）であり、多くの参加者にとって参加しやすい日時であった。あまり適切でなかったと回答した参加者は 1 名で、平日 18 時以降の開催希望があった（図 9）。

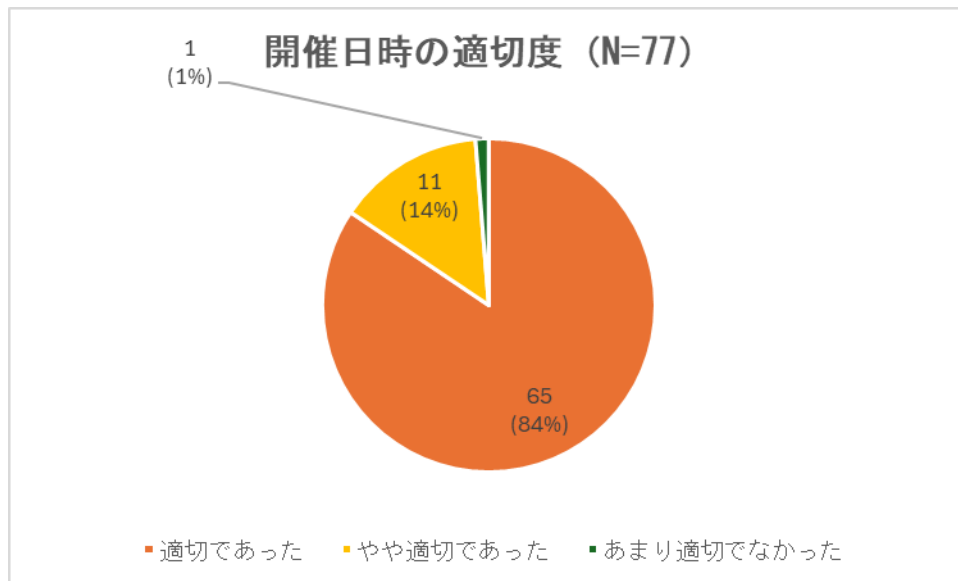


図 9. 開催日時の適切度

#### 6) 研修会の学びと感想

本研修会における参加者の学びや感想の一部を表 1 に示す。なお、主な学びや感想として、生成 AI を使用している可能性のある学生への対応方法ならびに生成 AI との上手な付き合い方について知ることができた、という声が目立った。

表 1 研修会の学びと感想

| 自由記述                                                                                                                                                                      |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 昨年の実習記録で AI を利用したのではないかと疑った例があり、対応をどうしたらよいか考えていたためとても参考になりました。                                                                                                            |
| AI の積極的活用方法について、理解することができました。教育補助的な活用をし、実習記録への負担軽減とともに患者と関わる十分な時間確保に繋げていきたいと思います。                                                                                         |
| 学生が AI を活用することに対する考え方についてどのように考えてよいかわからなかったが、考えるヒントをたくさんいただいた。まずはガバナンスなど。                                                                                                 |
| 臨地実習前に行う、ペーパーペイシエントと GPTs での対話学習の違い、どちらも患者さんの雰囲気や間合いがくみ取れない点は一緒ですが、どのようなメリットがあるのかももう少し具体的に知りたかったです。学生が AI を活用している具体的ログを見ることで思考過程が理解できるので、ログを見たかったです。                      |
| 学生へ生成 AI の使用禁止など到底できないので、ステルス利用されて情報漏洩されるよりも、健全な活用方法について、上司とも検討していこうと話していた時にこの研修だったので、非常に参考になりました。                                                                        |
| 現場の若手看護師も、最近 AI を用いるようになってきているが、リテラシーが低く、都合の良い情報のみ持ってくることに懸念がありました。また、患者さんの個人情報を安易に AI で用いているのではないかと不安になっていました。本日学生の実習向けの「生成 AI 入力前チェックリスト」について学べましたが、当院でも早々に提示したいと思いました。 |

学部教育において、どちらかというと生成 AI は制限する方針であったが、学生の成長という観点では限界があると感じていた。そのような中で、本研修を受けて活用する方向性を見出すことができた。

学生に、こういう使い方は OK、患者さんの情報は絶対にだめ、と具体的に伝えることが重要だとわかりました。

今後も AI についての講義をしてもらいたいです。

生成 AI を禁止にするのではなくうまく付き合っていくという考え方のもと、大学でも安心して学生が使用できる AI をはじめてから導入しておくこともいいのではないかと思いました。まだまだ自分の大学は遅れているのでそういった提案ができると教員も学生も生成 AI をうまく活用できると思いました。精神看護で患者さんを想起させる動画を作成したいと考えていたのでとても参考になりました。ありがとうございます。

学部教育に生成 AI を活用する方法を学び、自分自身の AI リテラシーやスキルの向上にも役立つように感じた。一点気がかりなことは、大学単位で生成 AI 環境が整っていない場合、それを（課金の有無も含めて）学生側で整える必要があると思われ、そうすると学生間に格差が生じてしまわないかということである。これについては、講師の先生の見解をお聞きしたいと感じた。

## V. まとめ

参加者の特徴として、大学等教育機関に所属で中堅と想定される年代が多かった。アンケート結果より、今回の内容は参加者にとって満足度が高く、有用だと感じられた研修であったことが示された。自由記載からは、参加者が教育における生成 AI の活用について、取り組むべき課題と認識しながらも、具体的にどう対応すべきか悩んでいたことがうかがえた。今回の研修によって、生成 AI の活用における課題解決のヒントを得て、積極的な活用が可能だと感じられたことが、高い満足度につながったのではないかと考える。

開催日時について、アンケート結果では適切だとする回答であったが、事前登録者数に対する実参加者数が 54.2%であったことから、当日欠席した申込者にとって参加が難しい日時であった可能性がある。また、無料でオンライン開催という設定の研修は、申込みしやすいものの、研修参加に対する認識が薄くなってしまうことが推察される。今後の課題として、開催方法や開催日時について、引き続き検討していく必要があると考える。

## 引用文献

香田将英. (2025). プロローグ. 松井健太郎, 香田将英, 吉田和生, 医療者のための Chat GPT BEYOND(p. 16). 新興医学出版社.

永井翔. (2025). 焦点 AX 時代の AI デバイドに挑む看護教育. 看護教育, 66(5), 596-603.